

# 小社遺跡（第3次）発掘調査報告

## 一度会郡玉城町一

2022（令和4）年2月

三重県埋蔵文化財センター







## 例　言

1. 本書は、三重県度会郡玉城町小社曾根に所在する小社遺跡の工事立会による埋蔵文化財調査報告書である。
2. 工事立会は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。
3. 工事立会の体制は、次のとおりである。

立会担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 稔積裕昌 角正芳浩 北井徹 中村法道  
櫻井拓馬 倉野雅文 元座範子 若井啓熐

整理担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 角正芳浩 橋口太地

立会期間 令和元年12月7日から令和2年2月24日

立会面積 285 m<sup>2</sup>
4. 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が担当し、本書の編集・執筆は橋口が行った。
5. 当発掘調査の記録は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡　例

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1:25,000地形図「伊勢」、県共有デジタル地図（平成29年測図）等を基にしている。
2. 調査区位置図は、三重県総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2017三重県共有デジタル地図（数値地形図2500（道路線1000）」を使用し、調整したものである。（承認番号：令和3年4月5日付三総合地第1号）
3. 方位は、平面座標系第VI系における座標北を使用している。
4. 標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
5. 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（19版）』による。
6. 遺物実測図の凡例は、以下の通りである。
  - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
  - ・色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（19版）』による。
  - ・土器の残存率は12分割して示している。口縁部が残存していないものについては、底部等の残存率を示している。また、1/12以下のものは、「小片」等と示している。
  - ・計測値は完存もしくは復元の値であり、口縁・底径は実測時の接地面で計測している。
7. 遺物写真図版の番号は、遺物実測図の番号と対応している。
8. 遺物写真図版は、縮尺不同である。

## 目 次

第Ⅰ章 前言 .....	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の経過	
3 文化財保護法に関する諸手続き	
第Ⅱ章 位置と環境 .....	3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	

第Ⅲ章 遺構 .....	5
--------------	---

- 1 遺構の概要と基本層序
- 2 遺構各説

第Ⅳ章 遺物 .....	9
--------------	---

第Ⅴ章 結語 .....	15
--------------	----

## 挿図目次

第1図 調査区位置図 .....	2
第2図 遺跡位置図 .....	4
第3図 遺構平面図① .....	6
第4図 遺構平面図② .....	7

第5図 SD 4 土層断面図 .....	7
第6図 遺物実測図（遺構） .....	10
第7図 遺物実測図（Pit、包含層） .....	11
第8図 小社遺跡とその周辺の発掘調査状況 .....	16

## 表 目 次

第1表 遺構一覧表 .....	8
第2表 遺物観察表① .....	13

第3表 遺物観察表② .....	14
第4表 遺物観察表③ .....	15

## 写真図版目次

- ・写真図版 1 （遺構）
- ・写真図版 2 （遺物①）
- ・写真図版 3 （遺物②）

- ・写真図版 4 （遺物③）
- ・写真図版 5 （遺物④）

# 第Ⅰ章 前言

## 1 調査に至る経過

高度水利機能確保基盤整備事業は、担い手の育成、支援、農地の集積・集約化及び農産物の高付加価値化、生産コストの削減などの農業の競争力向上に必要な農用地の大区画化や、用水路のパイプライン化などの生産基盤を整備するものである。

伊勢農林水産事務所では、宮川左岸地区において既設農業用水管の敷設替えを行っているが、この事業地内には、周知の遺跡である小社遺跡が存在しており、工事が令和元年度に遺跡の範囲内で行われることから、伊勢農林水産事務所より労務提供を受け、工事立会による記録保存を行うこととなった。

工事立会調査は、令和元年12月7日に開始した。当初は工事の施工に合わせて調査を実施していたが、遺構が想定を超えて高い密度で残存しており、そのままの調査体制では、工事の進捗に大幅な遅れを及ぼすことが予想された。制約された時間の中では調査の精度が保たれないことから、伊勢農林水産事務所との協議により、令和2年1月7日より、発掘調査を工事に先行して実施することとなった。

## 2 調査の経過

今回の調査は、農業用水管の敷設替えに伴う掘削範囲の工事立会によるものである。工事立会は、令和元年12月7日から令和2年2月4日に実施した。

調査の範囲は工事の施工幅にあわせ、幅1m、延長約270mで、調査面積は268m<sup>2</sup>である。調査は夜間の往来に供する必要があるため、各日ごとに調査を終了し、埋め戻しを行なった。

アスファルト及び道路基盤層は重機で掘削し、遺構検出・遺構掘削は人力で行った。

遺構実測図は1:20で作成した。なお、土層図は時間の制約により作成していない。

調査における記録写真は、ニコンD3300を用い、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いた。遺物の撮影にはニコンD800Eを使用した。

## 3 文化財保護法に関する諸手続き

今回の調査にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等にかかる法的措置は以下のとおりである。

○文化財保護法第94条に基づく三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知）

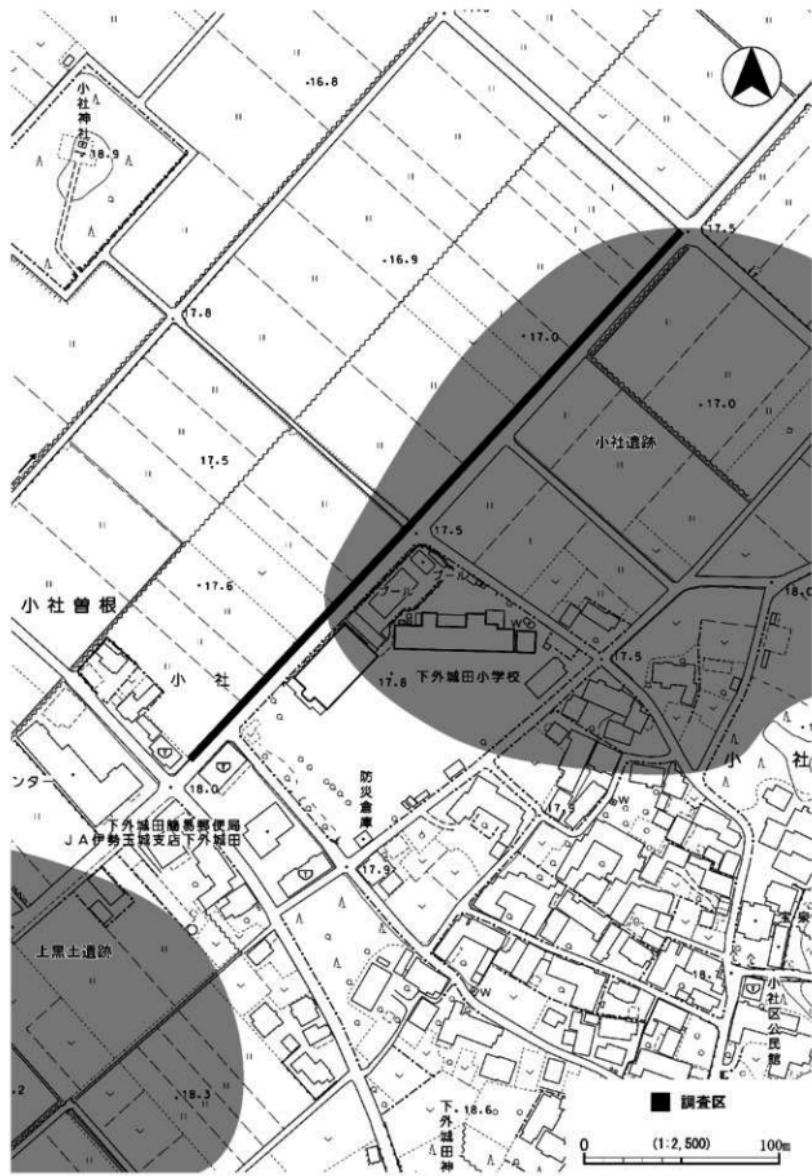
・平成30年8月3日付 効農第3207号

○文化財保護法第100条第2項に基づく「埋蔵文化財の発見・認定通知」（松阪警察署長あて県教育委員会教育長通知）

・令和2年3月26日付 教委第12-4425号



写真1 発掘調査風景（南西から）



第1図 調査区位置図 (1:2,500)

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 地理的環境

小社遺跡（1）は伊勢平野の南限に位置し、直下には中央構造線が東西に走る。当地では海洋プレート等の沈み込みに伴って、三波川変成帯が内帶である領家変成帯に接触する。

これを南西から北東に流れる宮川は三重県と奈良県との県境に立地する大台ヶ原山（標高1,696m）を水源とし、当遺跡はその支流の一つである汁谷川左岸の中位段丘上に立地している。

### 2 歴史的環境

旧石器時代 アレキリ遺跡（2）、岩出地区遺跡群（3）、上地山遺跡（4）、西世古遺跡（5）、ミドロ遺跡（6）、波瀬B遺跡（7）など、旧石器時代の遺跡が多く分布している。

縄文時代 岩出地区遺跡群や仲野遺跡（8）では草創期ごろを中心とする石器群が確認されるが、早期から中期にかけて遺跡の分布は希薄である。後期に入ると明豆遺跡（9）、佐八藤波遺跡（10）、中新田遺跡（11）など遺跡の増加がみられる。

弥生～古墳時代 弥生時代前・中期の遺跡については希薄な状況であるが、後期になると遺跡数が急激に増加する。特に、小社遺跡が立地する小社台地上には、上地山遺跡、小社遺跡、中楽山遺跡（12）、野垣外遺跡（13）といった大規模な遺跡が帶状に並び、堅穴建物や方形周溝墓等が確認されている。田丸道遺跡（14）では弥生時代以降の旧河道や古墳時代の堅穴住居が検出されている。

小社遺跡では凝灰岩製の石錠が表採されており、周辺に前期古墳が築造されていた可能性がある。当該地域に現存する古墳のほとんどは中期後半から後期に位置付けられ、小社遺跡の北側には馬形埴輪が出土した辻ノ長古墳群（15）や銅鏡が確認された佐田山古墳群（16）が分布している。

飛鳥～平安時代 小社遺跡の西には須恵器を焼成した窯跡が多数見つかっている。原古窯址群（17）では飛鳥時代～奈良時代の窯が11基、市寄古窯跡（18）

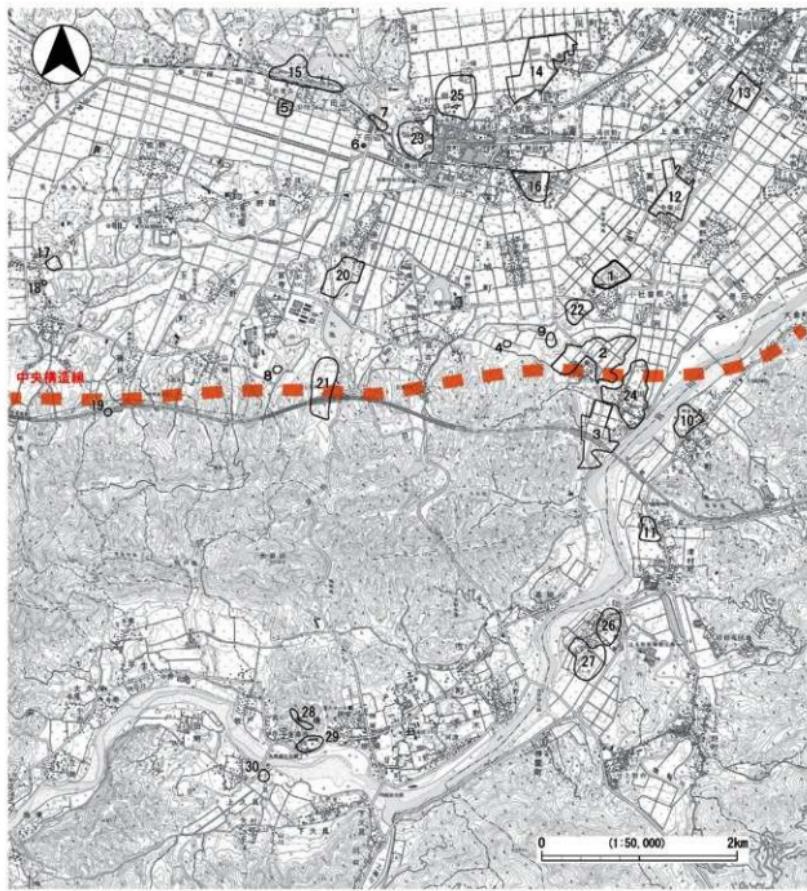
では同時代の窯が数基、泉貢窯跡（19）では10世紀前半ごろの窯が1基見つかっている。これらの地域から多気町野中、森荘、笠木、相可にかけては、「外城田窯跡群」と総称されており、当時の地域は南勢地域最大の須恵器生産地となっていたといわれている。

この時期の代表的な集落遺跡としては、上の山遺跡（20）で、平安時代の掘立柱建物2棟と鎌倉時代の掘立柱建物3棟などが見つかっている。また、楠ノ木遺跡（21）では、平安時代から室町時代後半にかけての掘立柱建物20棟、井戸8基、中世墓12基などの遺構が見つかっているほか、田丸道遺跡では平安時代の掘立柱建物や縄袖陶器が確認されている。

鎌倉～戦国時代 小社台地上には上黒土遺跡（22）があり、鎌倉時代前半のものと思われる区画溝や掘立柱建物数棟が見つかっている。その南側に位置するとの山・アレキリ遺跡では平安時代から室町時代にかけての集落跡がみつかっており、縄袖陶器や青磁が出土している。1336年には田丸城（23）が築城され、北畠氏の拠点の一つとなる。この地における北畠氏の影響力が大きくなるに従って、神額は次第に侵食され、伊勢神宮の力は急速に衰えていく。戦国時代には岩出城（24）が築かれ、北畠氏が拠点として機能していたとみられる。

### 参考文献

- 玉城町史編纂委員会1995『三重県 玉城町』上巻
- 玉城町教育委員会1985『上地山遺跡発掘調査報告書』
- 伊勢市2012『伊勢市史』
- 三重県埋蔵文化財センター1991『楠ノ木遺跡』
- 同2006『岩出遺跡群発掘調査報告』
- 同1992『上の山遺跡発掘調査報告』
- 同1992『波瀬B遺跡発掘調査報告書』
- 同1992『泉貢窯跡・山神城跡』



- 1. 小社遺跡
- 2. との山・アレキリ遺跡
- 3. 岩出地区遺跡群
- 4. 上地山遺跡
- 5. 西世古遺跡
- 6. ミドロ遺跡
- 7. 波瀬B遺跡
- 8. 仲野遺跡
- 9. 明豆遺跡
- 10. 佐八ツ波遺跡
- 11. 中新田遺跡
- 12. 中楽山遺跡
- 13. 野垣外遺跡
- 14. 田丸道遺跡
- 15. 犀ノ長古墳群
- 16. 佐田山古墳群
- 17. 原古窯址群
- 18. 市寄古窯址群
- 19. 泉貢窯跡
- 20. 上の山遺跡

- 21. 楠ノ木遺跡
- 22. 上黒土遺跡
- 23. 田丸城跡
- 24. 岩出城跡
- 25. 寺田遺跡
- 26. 中道遺跡
- 27. 塚の上遺跡
- 28. 蓮華寺城跡
- 29. 蓮華寺跡
- 30. 森添遺跡



第2図 遺跡位置図 (1:50,000)

## 第III章 遺構

### 1 遺構の概要と基本層序

調査区は幅約1m、延長約270mの細長いものである。地表面の現況における標高は調査区の西端で18.2m、東端で17.8mを測り、東に向かってやや下降している。

基本層序としてはアスファルト及び道路基盤層が40~60cmほどの厚みがあり、その直下に中世の遺物を含む黒褐色土層を確認した。これは30~40cmほど堆積しており、この下の明黄褐色シルト層から堅穴建物、溝、土坑、ピット等の遺構を検出した。検出面の標高は西端で17.5m、東端で16.9mであり、東に向かって緩やかに落ち込んでいる。

### 2 遺構各説

堅穴建物8棟、溝5条、土坑3基の他、ピット群を検出した。なお、遺構の位置は調査区西端からの距離で示す。

#### (1) 堅穴建物

**S H 2** 35m付近で検出し、平面形は隅丸方形で、南北方向で約6.2mの規模をもち、方位はほぼ正方位に乗る。壁周溝は幅0.2m、深さ約15cmである。

**S H 3** と重複するが切り合い関係は不明。

**S H 3** **S H 2** と重複し全形は不明だが、平面形は隅丸方形と推測される。深さは約20cmである。

**S H 8** 58m地点付近で検出し、壁周溝は幅0.2m、深さ約5cmである。

**S H 10** 106m地点付近で検出し、南北方向で5.4mの規模をもち、全形は不明。壁周溝は幅0.4m、深さ約5cmである。壁周溝内に径0.1~0.2m、深さ5~10cmの小ピットを複数確認しており、壁柱穴と考えられる。

**S H 11** 南北方向で3.3mの規模をもち、120m付近で検出した。調査区に直交する幅0.25m、深さ約5cmの南側壁周溝を確認した。南側は壁から約1m付近に段差があり、0.1m程度低くなっている。

**S H 15** 128m付近で検出し、堅穴建物と考えられ

る。北側は擾乱を受けている。壁際で長軸0.8m以上、短軸0.75m、深さ約15cmの土坑を検出しており、貯蔵穴の可能性がある。

**S H 16** 平面形は隅丸方形で、165m付近で検出した。南北に4.8m以上の規模をもち、深さは約10cmである。壁周溝は幅0.15m、深さ約5cmである。

**S H 17** 196m付近で検出した堅穴建物である。北側のみが検出でき、壁周溝は確認できなかった。

**S H 18** 222m付近で検出した堅穴建物である。東壁のみの検出で、東西方向で3.3mの規模をもつ。深さは約20cmである。平面形は隅丸方形である。中央付近で検出した、長軸0.5m以上、短軸0.6m、深さ約45cmの土坑は貯蔵穴の可能性がある。

#### (2) 溝

**S D 4** 45m地点で検出した幅0.6m、深さ約65cmの溝である。東西へのび、調査区外へ続く。

**S D 5** 50m地点で検出した幅1.1m、深さ約20cmの溝である。東西へのび、調査区外へ続く。

**S D 9** 90~98mにかけて、南東から北西方向に調査区を横断し、幅0.45m、深さ約10cmである。

**S D 13** 120m~125m地点にかけて、調査区を南西から北東方向に斜断し、幅0.4~0.7m、深さ約15cmである。

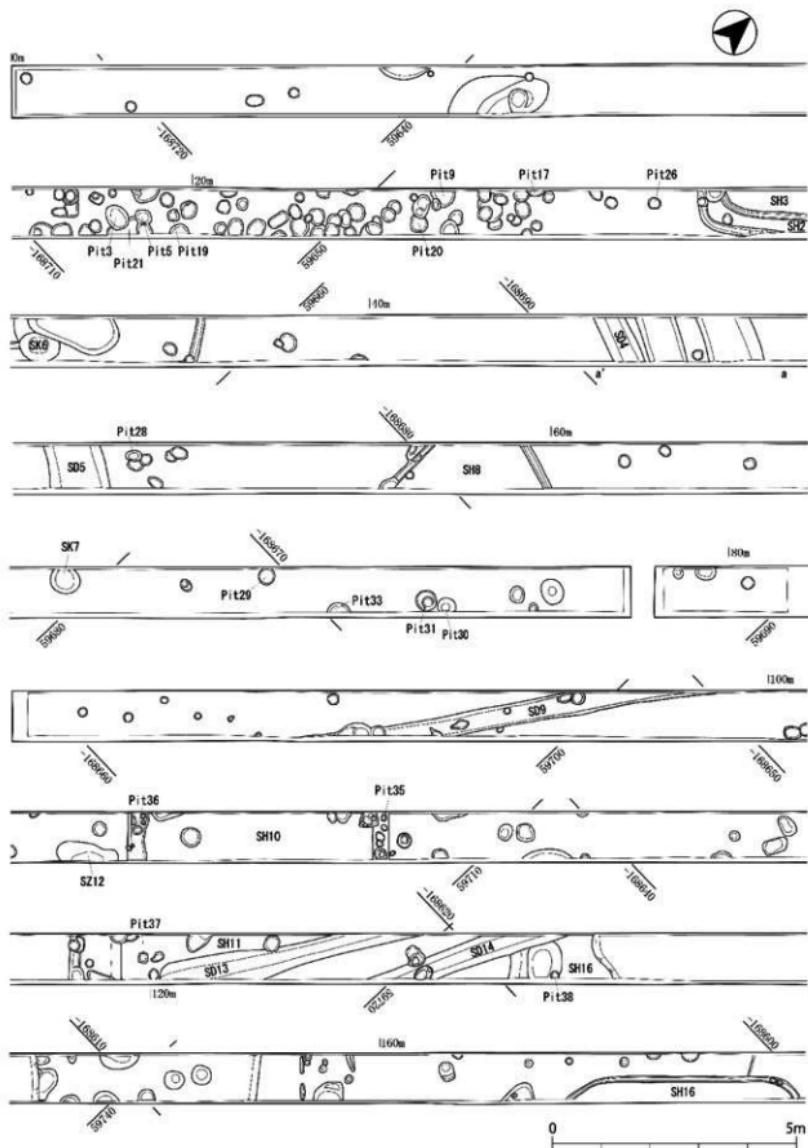
**S D 14** 124~128m地点にかけて調査区を南西から北東方向に斜断する幅0.5m、深さ約15cmの溝である。**S D 9**、**S D 13**と方向を同じくする。

#### (3) 土坑

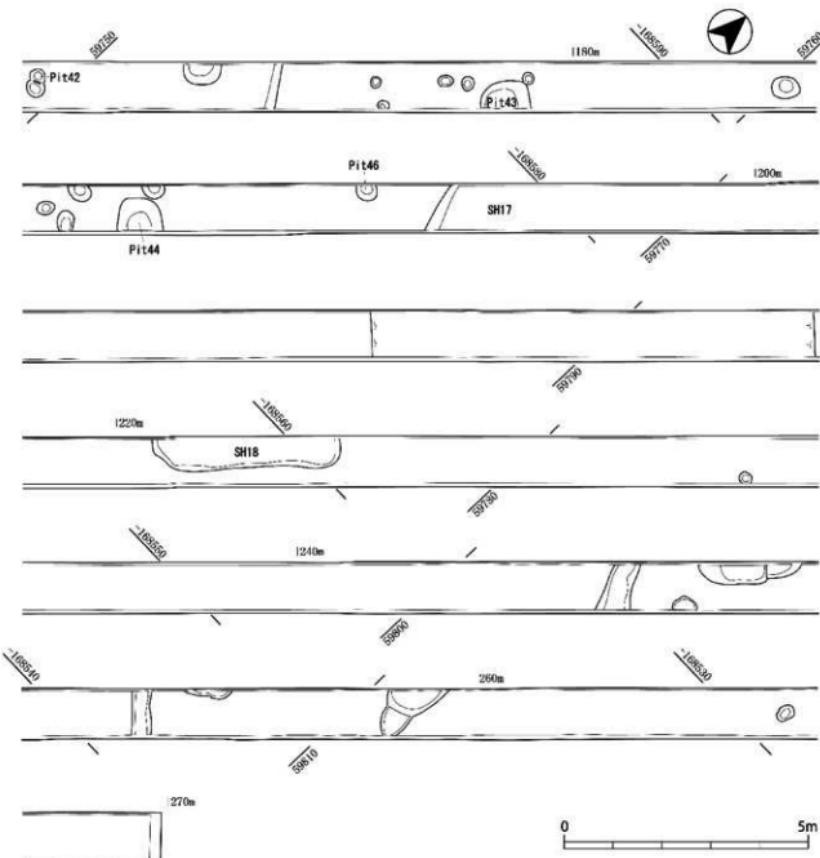
**S K 1** 調査区南端近くで検出した。調査区外へ広がり全形は不明だが、長軸約1.1m以上の楕円形を呈すると考えられる。深さは約15cmである。

**S K 6** **S H 2**・**3** と重複する土坑である。平面形は長軸0.85m、短軸0.6mの楕円形で、深さは約80cmである。

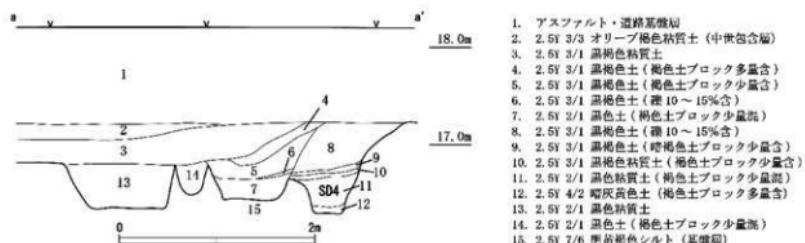
**S K 7** 66m付近で検出した土坑である。一部が調査区外へ続くが、平面形は径0.6mの円形と考えられる。深さは約20cmである。



第3図 造構平面図① (1 : 100)



第4図 遺構平面図② (1 : 100)



第5図 SD 4 土層断面図 (1 : 50)

1. アスファルト・道路基盤層
2. 2.51 3/3 オリーブ褐色粘質土（中世包含層）
3. 2.51 3/1 黒褐色粘質土
4. 2.51 3/1 黑褐色土（褐色土ブロック多量含）
5. 2.51 3/1 黑褐色土（褐色土ブロック少量含）
6. 2.51 3/1 黑褐色土（差 10 ~ 15%含）
7. 2.51 2/1 黑褐色土（褐色土ブロック少量含）
8. 2.51 3/1 黑褐色土（差 10 ~ 15%含）
9. 2.51 3/1 黑褐色土（暗褐色土ブロック少量含）
10. 2.51 3/1 黑褐色粘質土（褐色土ブロック多量含）
11. 2.51 2/1 黑褐色粘質土（褐色土ブロック少量含）
12. 2.51 4/2 暗灰黃色土（褐色土ブロック少量含）
13. 2.51 7/1 黑褐色土
14. 2.51 2/1 黑色土（褐色土ブロック少量含）
15. 2.51 7/6 明黃褐色シルト（基盤層）

第1表 遺構一覧表

路号	番号	選出地点(m)	遺構規模			時期	主な出土遺物	備考
			長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
SK	1	8	1.1	0.25以上	15			
SH	2	31~33	6.25	0.2	17	弥生末 ~古墳前期	土師器	SH3と重複
SH	3	30.5~36.5	2.0以上	—	22	弥生末 ~古墳前期	土師器	SH2と重複
SD	4	45	0.6	1.0以上	65	平安末 ~鎌倉	土師器、山茶椀	
SD	5	50~51	1.1	1.0以上	20			
SK	6	33	0.85	0.6以上	80	弥生後期	弥生土器	
SK	7	66.5	0.6	0.5以上	20			
SH	8	56.5~60	—	0.2	5	弥生後期 ~古墳前期	弥生土器、土師器	
SD	9	90~98.5	8.6以上	0.45	10			
SH	10	103~108	5.4	1.0以上	5	弥生末 ~古墳前期	土師器	壁柱穴あり
SH	11	118~不明	3.3	1.0以上	5	弥生後期 ~古墳前期	弥生土器、土師器	貯藏穴あり
SZ	12	101.5~102.5	13	0.4以上	30			
SD	13	120~125	5.4	0.4~0.7	15	弥生末 ~古墳前期	土師器	
SD	14	124~128	4.0	0.5	15	弥生末 ~古墳前期	土師器	
SH	15	127~(129)	2.0以上	1.0以上	15			
SH	16	165	4.8以上	0.5以上	10	弥生末 ~古墳前期	土師器	
SH	17	192.5~	5.5以上	1.0以上	25			
SH	18	220~223	3.3	0.8以上	20	弥生末 ~古墳前期	土師器	貯藏穴あり

## (4) 不明遺構

SZ12 102m地点で検出し、深さ約30cmである。

## (5) ピット

調査区全域で検出されているが、南側に行くほど希薄になり、16m~30mの範囲に密集する。建物としてのまとまりは確認できないが、掘立柱建物が存

在したことは間違いないと思われる。

なお、Pit43・44については調査当初は柱穴としていたが、平面形状が不整形かつ大型であり、埋土からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土することから、当該期の廃棄土坑である可能性が高い。

## 第IV章 遺 物

本調査では弥生土器や土師器、山茶碗が出土した。遺物は破片資料が多く、残存状況が良い遺物は少ない。遺物の時期については、堅穴建物出土遺物は概ね弥生時代後期から古墳時代前期の様相を示す。溝や土坑についても中世溝のS D 4 を除くと堅穴建物と同様の時期の遺物がみられる。調査区西側のPit群からは平安時代後期から鎌倉時代にかけて遺物がまとまって出土しているが、東に行くにつれて弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が目立つようになる。

### S H 2 出土遺物（1～6）

1～3は土師器の壺である。1は小型壺で外面にヘラミガキを施す。2は広口壺の小片である。3は底部に木葉圧痕が確認できる。

4～6は土師器の高杯である。4は内外面ともにヘラミガキを施す。6は脚部片であり、櫛描直線文が3帯施される。スカシは2段あり、上段は1方向、下段は3方向に穿たれている。

時期としては弥生時代終末期から古墳時代前期に位置付けられる。

### S H 3 出土遺物（7）

7は土師器の小型壺の口縁部である。外面の一部に煤が付着している。

### S H 8 出土遺物（8～13）

8～10は土師器の壺である。8は外面にヘラミガキを施した小型壺である。9は広口壺の肩部で、外面にヨコハケを施し、頸部直下に櫛歯状の刺突文帯が2段巡る。10は底部であり、内外面にハケを施す。

11は台付甕ないしは台付壺である。内面には工具ナデが施されている。

12・13は弥生土器ないしは土師器の高杯脚部片である。12は3方向スカシを有し、脚部上半に櫛描直線文がめぐる。13は櫛描直線文が3帯施されている。

遺物の時期は弥生時代後期以降に位置付けられる。

### S H 10 出土遺物（14～17）

14は甕あるいは鉢の口縁部片である。

15～17は土師器高杯の脚部である。15は外面にハケを施した上に貝殻腹縁連弧文が巡る。16は小片であるが、外面はヘラミガキをした上に櫛描直線文を

めぐらしている。17は外面にヘラミガキ、内面はハケを施している。スカシは2段穿たれており、脚部上半に櫛描直線文がめぐる。

### S H 11 出土遺物（18～24、26・27）

18・21は弥生土器ないしは土師器の壺である。21は頭部片で、内外面にミガキを施し、刻目が入った貼付突巒がめぐる。

19、22～24は土師器の甕である。19は受口状口縁甕の口縁部である。外面には煤が全面的に付着している。22は土師器甕の口縁部である。頭部から体部にかけての外面にナナメハケ、頭部内面にはヨコハケを施す。23・24は台付甕の脚部である。ともに外面にはハケを施す。24は脚端部を折り返している。

20、26・27は土師器の高杯である。20は脚部片で、S H 11の壁周溝から出土している。26は畿内系の高杯であり、内外面にヘラミガキを施す。27では内面のヘラミガキは確認できるが、外調整は表面が摩滅しており不明瞭である。

やや時期幅がみられるものの、弥生時代終末期から古墳時代前期の様相を示す。

### S H 16 出土遺物（25・34）

25は土師器の甕である。外面には全面的に煤が付着しており、調整が不明瞭である。体部内面には工具ナデを施す。

34は甕の口縁部である。表面が摩滅しており調整は不明瞭である。

### S H 18 出土遺物（40・43）

40はいわゆる瓢甕の口縁部で内外面にヘラミガキを施す。

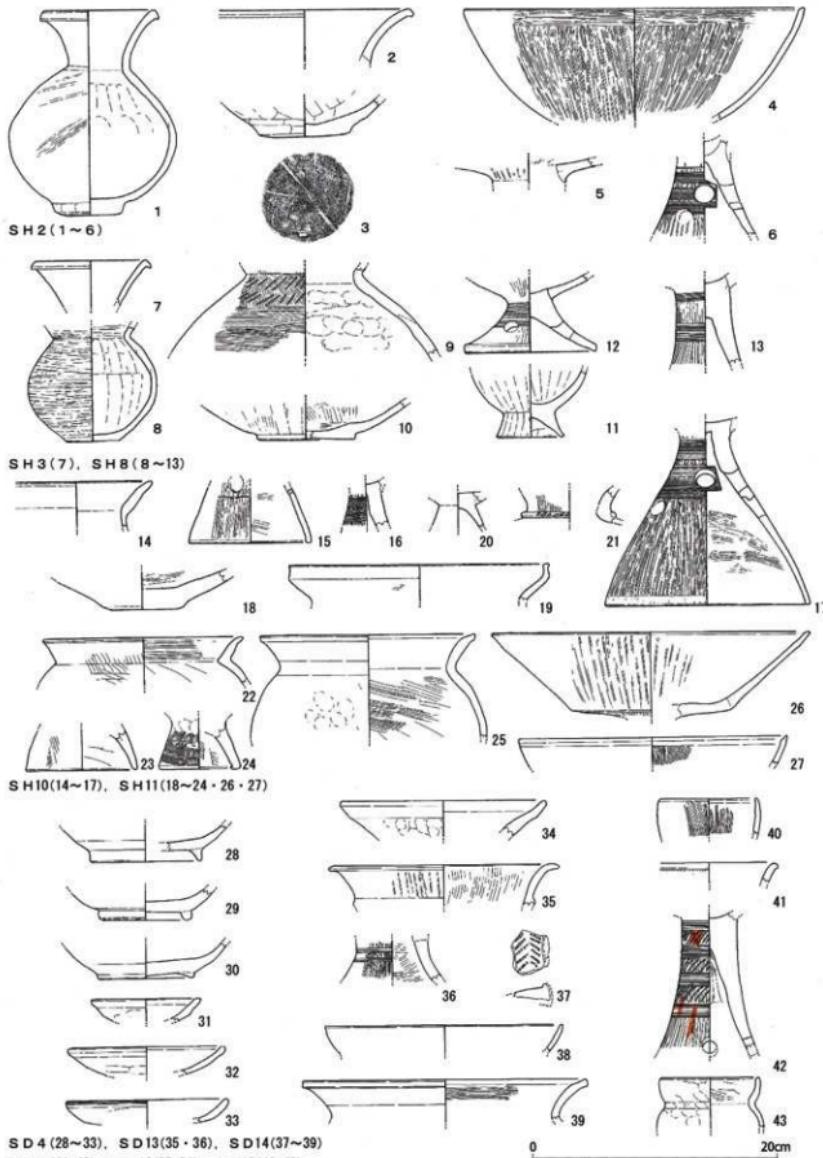
43は小型鉢で、外面に煤が付着し、調整は不明瞭である。口縁部の内面には工具ナデを施している。

### S D 4 出土遺物（28～33）

28～30は山茶碗である。28・30は断面三角形、29は断面台形の貼付高台を有し、29は初穀圧痕が確認できる。

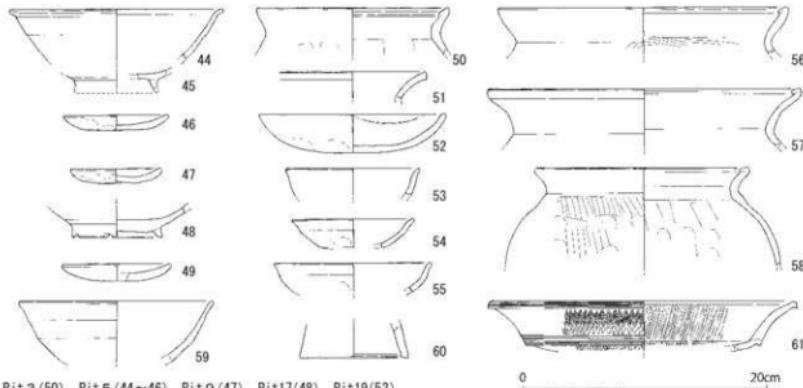
31～33は土師器の皿である。32は外面に工具ナデを施す。

山茶碗は藤澤編年<sup>11</sup>の第4～5型式に、土師器は

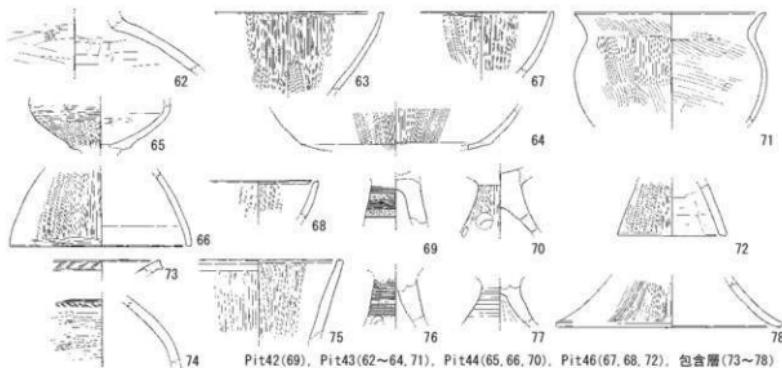


S D 4 (28~33), S D 13 (35~36), S D 14 (37~39)  
S K 6 (41, 42), S H 16 (25, 34), S H 18 (40, 43)

第6図 遺物実測図(遺構) (1:4)



Pit3(50), Pit5(44~46), Pit9(47), Pit17(48), Pit19(52),  
Pit20(51), Pit21(49), Pit26(61), Pit33(53~58), Pit38(59~60)



第7図 遺物実測図 (Pit、包含層) (1 : 4)

斎宮編年<sup>21</sup> III期の後半に位置付けられ、12世紀後半  
(平安時代末～鎌倉時代初頭) の様相を示す。

#### S D13出土遺物 (35・36)

35は土師器の広口壺の口縁部である。内外面にヘラミガキを施し、頸部には宽带がめぐる。

36は土師器高杯の脚部である。幅の狭い櫛描直線文を2条めぐらせている。

#### S D14出土遺物 (37~39)

37は加飾された広口壺の口縁部である。口縁内面には列点文を羽状にめぐらせている。

38は土師器の高杯ないしは鉢である。

39は土師器の甕である。内面にヨコハケを施す。

#### S K 6出土遺物 (41・42)

41は壺あるいは鉢の口縁部である。外面上にタテハケを施すが、全体的に摩耗しており明瞭ではない。

42は弥生土器の高杯の脚部である。外面上にはヘラミガキをし、櫛描直線文が4条めぐっている。条間には櫛状刺突文を施す。4方にスカシが穿たれており、部分的に赤彩が確認できる。

以上より、弥生時代後期以降に位置づけられる。

#### Pit3出土遺物 (第6図50)

50は土師器甕である。口縁部を内側に折り返す。

#### Pit5出土遺物 (44~46)

- 44は灰釉陶器の碗である。  
45はロクロ土師器の碗である。底部外面には糸切痕がみられ、貼付高台を有する。  
46は土師器の皿である。
- 時期としては斎宮編年Ⅲ期の前半（10世紀後半～11世紀・平安時代後期）に位置付けられる。

#### Pit9出土遺物 (47)

- 47は土師器の皿である。

#### Pit17出土遺物 (48)

- 48は山茶碗の底部である。断面三角形の貼付高台を有す。

#### Pit19出土遺物 (52)

- 52は土師器の皿である。

#### Pit20出土遺物 (51)

- 51は土師器の甕ないしは壺の口縁部である。

#### Pit21出土遺物 (49)

- 49は土師器の小皿である。

#### Pit26出土遺物 (61)

- 61は弥生時代後期の高杯である。外面には櫛描波状文とその下に疑問線文をめぐらし、内面にはヘラミガキを施す。

#### Pit33出土遺物 (53~58)

- 53～55は土師器の碗と杯である。いずれも口縁端部が外反する。

- 56～58は土師器の甕である。いずれも口縁端部を内側に折り返す。56・58は外面にハケ調整を施し、58は内面に工具ナデをしている。

供膳具は斎宮編年Ⅲ期前半、甕は伊藤裕偉氏による編年<sup>3)</sup>の甕aに分類され、10世紀後半～11世紀（平安時代後期）の様相を示す。

#### Pit38出土遺物 (59・60)

- 59は山茶碗である。口縁部はやや外湾する。

- 60は台付甕の脚部である。

#### Pit42出土遺物 (69)

- 69は土師器の高杯である。幅の狭い櫛描直線文を3条めぐらせている。

#### Pit43出土遺物 (62～64、71)

- 62は土師器壺の肩部である。内面にはハケ、外面には工具ナデを施し、調整はやや粗雑である。

- 63・64は土師器の高杯である。内面にはヘラミガ

キ、外面にはハケ調整をした上にヘラミガキを施している。

71は土師器の甕である。外面にはタテハケ、内面には工具ナデを施す。

以上の遺物は弥生時代終末期から古墳時代前期に概ね位置付けられる。

#### Pit44出土遺物 (65・66、70)

65・66、70は土師器の高杯である。65・66は同一個体とみられ、外面にはヘラミガキを施す。70は高杯の脚部で、外面にヘラミガキを施し、三方向スカラシが2段穿たれている。

いずれの遺物も弥生時代終末期から古墳時代前期に位置付けられる。

#### Pit46出土遺物 (67・68、72)

67・68、72は土師器の高杯である。67・68は口縁部の小片である。内外面にヘラミガキを施す。72は脚部で、外面にヘラミガキ、内面にはヘラケズリをそれぞれ施す。

以上の遺物は弥生時代終末期から古墳時代前期の様相を概ね示す。

#### 包含層出土遺物 (73～77)

73・74は土師器の壺である。73は口縁部の小片で、口縁端面には櫛齒状の刺突文がめぐる。74は肩部の破片で、櫛描直線文の下に櫛齒刺突文がめぐっている。

75～78は土師器の高杯である。75は口縁部で、内外面にヘラミガキを施す。76～78は高杯の脚部である。76はミガキを施した上に櫛描直線文をめぐらしており、その下にスカシを穿っている。77は脚部全面に櫛描直線文を施している。78は外面にハケ調整した上にヘラミガキを施す。

#### 註

1) 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号 三重県埋蔵文化財センター』

2) 大川勝宏2019「第3章 斎宮跡の土器編年の再検討」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査』出土遺物編 奈良歴史博物館

3) 伊藤裕偉2000「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島遺跡出土資料を中心とした考察」『島抜Ⅱ』 三重県埋蔵文化財センター

第2表 遺物観察表①

報告 番号	実測 番号	遺構	器種・様形	法量			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
				口径	器高	その他					
1	2-2	S82	土師器 壺	9.0	16.8	底径 4.0	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	褐	やや密	口径3/12 底径12/12	煤付着
2	2-1	S82	土師器 壺	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	浅黄褐	やや密	小片	
3	1-5	S82	土師器 壺	-	-	底径 7.5	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	浅黄褐	やや密	12/12	底部外面に 木葉IE痕
4	1-1	S82	土師器 高杯	27.8	-	-	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	浅黄褐	やや密	1/12	
5	1-3	S82	土師器 高杯	-	-	-	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐	やや密	小片	
6	1-4	S82	土師器 高杯	-	-	-	外面：ヘラミガキ 内面：工具ナデ	褐	やや密	小片	2段スカシ 櫛目直線文
7	2-3	S90	土師器 壺	9.0	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	褐	やや密	1/12	煤付着
8	3-1	S88	土師器 壺	-	-	底径 4.2	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	褐	やや密	12/12	底部にケズリ
9	4-3	S88	土師器 壺	-	-	脚部径 9.5	外面：ハケメ 内面：ナデ	褐	密	3/12	刺突文
10	2-4	S88	土師器 壺	-	-	底径 7.6	外面：ハケ 内面：ハケ	褐	やや密	3/12	
11	2-5	S88	陶土器 台付壺	-	-	台径5.1	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	褐	やや密	4/12	
12	4-1	S88	土師器 高杯	-	-	底径 10.8	外面：ミガキ 内面：ナデ	にぶい黄褐	密	1/12	スカシ 櫛目直線文
13	4-2	S88	陶土器 高杯	-	-	脚部径 4.5	外面：ミガキ 内面：ナデ	褐	密	12/12	櫛目直線文
14	4-4	S810	土師器 甕小林	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	褐	密	小片	煤付着
15	3-4-2	S810	土師器 高杯	-	-	底径 10.2	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ・ハケ	褐	密	1/12	貝殻模様 連弧文
16	3-2	S810	土師器 高杯	-	-	脚部径 2.7	外面：ヘラミガキ	褐	やや密	12/12	櫛目直線文 スカシ
17	3-4-1	S810	土師器 高杯	-	-	底径 16.6	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ・ハケ	褐	やや密	1/12	櫛目直線文 2段スカシ
18	5-2	S811	土師器 壺	-	-	底径 5.0	(表面摩滅)	褐	密	3/12	
19	3-3	S811	土師器 壺	21.2	-	-	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ	浅黄褐	やや密	1/12	外面煤付着
20	5-4	S811	土師器 高杯	-	-	脚部径 4.2	(表面摩滅)	褐	密	12/12	
21	5-3	S811	土師器 壺	-	-	脚部径 7.0	外面：ミガキ 内面：ナデ	にぶい褐	密	2/12	
22	4-5	S811	土師器 甕	16.3	-	脚部径 14.4	外面：ナデ・ハケ	浅黄褐	密	2/12	
23	4-7	S811	土師器 台付甕	-	-	底径 9.0	外面：ナデ・ハケ	にぶい褐	密	2/12	
24	5-1	S811	土師器 台付甕	-	-	底径 6.2	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	にぶい褐	密	2/12	
25	5-6	S816	土師器 甕	17.6	-	脚部径 14.5	外面：ナデ 内面：工具ナデ	にぶい褐	密	口径3/12 底径3/12	煤付着
26	1-2	S811	土師器 高杯	26	-	-	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐	やや密	4/12	謫内系
27	4-6	S811	土師器 高杯	22	-	-	外面：ナデ 内面：ミガキ	褐	密	1/12	
28	7-1	S84	山茶碗	-	-	底径 8.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	灰白	密	1/12	輪向高台 自然釉
29	6-6	S84	山茶碗	-	-	底径 7.1	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	灰白	密	7/12	粗粒压痕
30	6-5	S84	山茶碗	-	-	底径 7.7	外面：ナデ 内面：ロクロナデ	灰黄褐	密	12/12	
31	7-4	S84	土師器 小皿	8.8	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	褐	やや密	1/12	
32	7-2	S84	土師器 皿	12.4	-	-	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	にぶい褐	やや密	1/12	
33	7-3	S84	土師器 杯	13	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい褐	やや密	1/12	
34	5-5	S816	土師器 壺	16.8	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	褐	密	1/12	
35	7-6	S813	土師器 壺	18.2	-	-	外面：ヘラミガキ 内面：ハケ	浅黄褐	やや密	1/12	櫛目直線文
36	7-6	S813	土師器 高杯	-	-	脚部径 6.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケ	褐	やや密	小片	櫛目直線文

第3表 遺物観察表②

報告 番号	実測 番号	遺構	器種・様形	法量			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
				口径	器高	その他					
37	7-8	SB14	弥生土器 壺	-	-	-	(表面摩滅)	褐	やや密	小片	判定文
38	7-7	SB14	土師器 鉢	19.4	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	1/12	
39	8-1	SB14	土師器 甕	23.2	-	-	外面:ナデ 内面:ハケ	浅黄褐	やや密	1/12	
40	6-4	SH18	土師器 甕	7.8	-	-	外面:ミガキ 内面:ミガキ	明赤褐	密	小片	蝶付着
41	6-1	SH6	土師器 甕	-	-	-	外面:ハケ 内面:ナデ	にぶい褐	密	小片	
42	6-2	SH6	弥生土器 高杯	-	-	脚部径 4.6	外面:ミガキ 内面:ナデ	褐	密	12/12	"櫛目直線文 網状文帯、赤羽 4方向スカラシ"
43	6-3	SH18	土師器 小型桶	8	-	-	外面:ナデ 内面:工具ナデ	にぶい黄褐	密	小片	
44	10-2	p6	灰陶陶器 碗	17.3	-	-	外面:ロココナデ 内面:ロココナデ	にぶい黄褐	密	1/12	
45	10-3	p5	ロクロ土師器 甕	-	-	底径 7.0	外面:ロココナデ 内面:ロココナデ	にぶい褐	密	小片	
46	10-1	p5	土師器 甕	8.5	1.3	-	外面:ナデ 内面:ナデ	浅黄褐	密	2/12	
47	10-4	p9	土師器 甕	7.4	1.2	-	外面:ナデ 内面:ナデ	にぶい褐	密	2/12	
48	8-3	p17	山茶椀	-	-	底径 7.2	外面:ロココナデ 内面:ロココナデ	灰白	密	12/12	輪付高台 系底
49	10-5	p21	土師器 小皿	8.6	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	にぶい褐	密	1/12	
50	8-2	p3	土師器 甕	15.8	-	-	外面:工具ナデ 内面:工具ナデ	浅黄褐	密	1/12	蝶付着
51	8-5	p20	土師器 甕	-	-	-	外面:ハケ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	2/12	
52	8-4	p19	土師器 杯	15.3	3.2	-	外面:ナデ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	2/12	内面底部に 付着物
53	11-5	p33	土師器 碗	10.8	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	にぶい褐	密	1/12	
54	11-4	p33	土師器 杯	9.9	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	にぶい褐	密	1/12	
55	11-6	p33	土師器 杯	12.8	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	にぶい黄褐	密	2/12	
56	11-2	p33	土師器 甕	23.7	-	-	外面:ハケ 内面:ハケ	にぶい褐	密	2/12	
57	11-3	p33	土師器 甕	25.8	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	にぶい褐	密	2/12	
58	11-1	p33	土師器 甕	17.4	-	-	外面:ハケメ 内面:工具ナデ	にぶい黄褐	密	2/12	
59	9-1	p38	山茶椀	15.8	-	-	外面:ロココナデ 内面:ロココナデ	灰白	密	1/12	
60	9-2	p38	土師器 台付甕	-	-	底径 8.8	外面:ナデ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	1/12	
61	8-6	p26	弥生土器 高杯	25	-	-	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	浅黄褐	密	1/12	波状文 網目直線文
62	12-2	p43	土師器 甕	-	-	-	外面:工具ナデ 内面:工具ナデ	浅黄褐	密	小片	
63	12-3	p43	土師器 高杯	-	-	-	外面:ミガキ 内面:ミガキ	浅黄褐	密	小片	1次調整 にハケ
64	12-1	p43	土師器 高杯	-	-	脚部径 15.5	外面:ミガキ 内面:ミガキ	浅黄褐	密	2/12	1次調整 にハケ
65	9-5-1	p44	土師器 高杯	-	-	脚部径 5.0	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	2/12	66と 同一個体か
66	9-5-2	p44	土師器 高杯	-	-	底径 14.8	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	1/12	66と 同一個体か
67	9-8	p46	土師器 高杯	-	-	-	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	浅黄褐	やや密	小片	
68	9-7	p46	土師器 高杯	-	-	-	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	浅黄褐	やや密	小片	
69	9-3	p42	土師器 高杯	-	-	脚部径 4.4	外面:ヘラミガキ	浅黄褐	やや密	6/12	櫛目直線文
70	9-4	p44	土師器 高杯	-	-	脚部径 3.6	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	浅黄褐	やや密	4/12	2段スカシ
71	12-4	p43	土師器 甕	16	-	-	外面:ハケメ 内面:工具ナデ	浅黄褐	密	3/12	

第4表 遺物観察表③

報告番号	実測番号	遺構	器種・様形	法量			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
				口径	器高	その他					
72	9-6	p63	土師器 高杯	-	-	底径 8.8	外面：ヘラミガキ 内面：工具ナデ	淡黄褐色	やや密	1/12	
73	13-3	p46	土師器 壺	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	淡黄褐色	密	小片	口縁埋面 に刷突
74	13-6	包	土師器 壺	-	-	-	外面：ミガキ	淡黄褐色	密	小片	横描直線文 横描斜突文
75	13-1	包	土師器 高杯	-	-	-	外面：ミガキ 内面：ミガキ	淡黄褐色	密	小片	
76	13-2	包	土師器 高杯	-	-	脚部径 3.6	外面：ミガキ	淡黄褐色	密	5/12	横描直線文 スカシ
77	13-4	包	土師器 高杯	-	-	脚部径 3.2	外面：工具ナデ	淡黄褐色	密	12/12	横描直線文 脚部内面しばり
78	13-5	包	土師器 高杯	-	-	底径 18.8	外面：ミガキ 内面：ミガキ	淡黄褐色	密	1/12	1次調査 にハケ

## 第V章 結語

### 調査の概要

小社遺跡は昭和57年度に玉城町教育委員会により発掘調査が実施されており、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴建物が22棟と鎌倉時代前半期の掘立柱建物および溝が検出された<sup>11)</sup>。

本調査は既往の調査区（ウエ松地区）の北側で実施しており、堅穴建物・土坑・溝・ピットなどを検出し、弥生土器や土師器、灰釉陶器、山茶碗が出土した。各遺構の時期を整理すると、堅穴建物とSD 13・14、SK 6は弥生時代後期半から古墳時代前期初頭（2世紀から3世紀）、調査区西側のピット群は平安時代後期（10世紀後半から11世紀）、SD 4は平安時代末から鎌倉時代初頭（12世紀後半）にそれぞれ位置付けられる。以下では既往の調査と整合しながら集落の時期的変遷を追う。

### 弥生時代後期～古墳時代前期初頭

堅穴建物や溝、土坑などが確認されており、弥生土器や土師器がまとめて出土している。今回出土した壺類はすべてく字状口縁か受口状口縁であり、S字状口縁の個体は確認できなかった。雲出川下流域左岸に位置する島賀遺跡では壺の口縁部形態の組成が整理されているが、雲出島賀I期からII期古相（弥生時代後期半から弥生時代終末期）ではなくく字状および受口状口縁の比率が高い<sup>12)</sup>。加えて、本遺跡出土の高杯の多くは脚部に複数条の横描直線文を

施し、島賀I期からII期の様相と一致している。前後の時期を含みつつ、集落の存続時期は弥生時代終末期が中心になるといえよう。ウエ松地区出土の壺類にもS字状口縁の個体は含まれず、く字状および受口状口縁の個体から構成されており、同様の年代観が与えられる。古墳時代前期に入り、集落の衰退あるいは移動が想定される。

個別の遺物をみていくと、S H10からは貝殻腹縁連弧文をもつ高杯脚部が出土している。これらは弥生時代終末期において安濃川流域を中心に分布しており<sup>13)</sup>、地域間における土器や人の移動や交流が想定できる。この他には畿内系の土器も僅かにみられ、当該期の小社遺跡が宮川流域において他地域との交流を担う集落の一つであったと考えられる。

### 平安時代後期～鎌倉時代

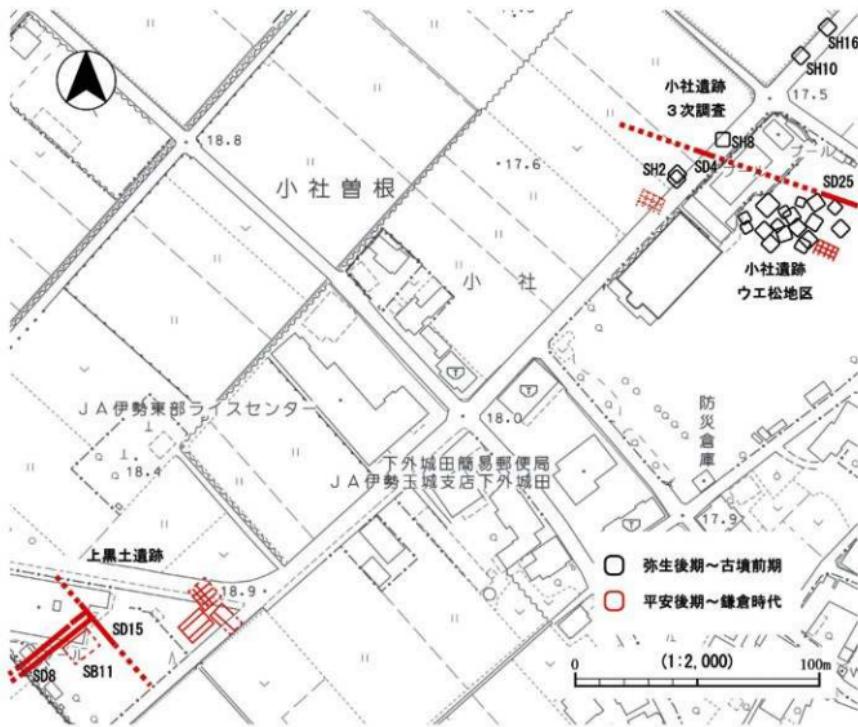
遺構数は少ないが、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけてのピット群や溝（SD 4）が検出されている。昭和57年度の調査では鎌倉時代前半の掘立柱建物1棟と溝（SD 24・25）が報告されているが、今回検出したSD 4は昭和57年度調査のSD 25に接続すると考えられる（図7）。SD 4（SD 25）の方位は同時期の掘立柱建物のそれと一致しており、区画溝と考えられる。やや時期的な隔たりがあるものの、調査区西側のピット群もこの区画溝に沿って造られた掘立柱建物の可能性がある。

小社遺跡の南西に位置する上黒土遺跡でも同時期に柵列や掘立柱建物が区画溝に沿って造営されている。瓦や白磁片も出土しており、有力者に関連する建物群であったことが考えられる<sup>4)</sup>。

小社遺跡や上黒土遺跡の南方500mほどに位置する岩出地区では平安時代末期に神宮祭主の館が成立したことが指摘されている<sup>5)</sup>。この岩出館は11世紀から16世紀まで存続したとされており、岩出地区内遺跡群の発掘調査では中世における拠点的な集落が確認されている<sup>6)</sup>。祭主館の具体的な立地は不明であるが、今回の調査で確認した溝やピット群はその成立時期と重なっており、『大神宮諸雜事記』には小社から汁谷川を通じて宮川に出るルートの記載もみられ<sup>7)</sup>、上黒土遺跡と併せて小社遺跡周辺に岩出館の関連施設があった可能性が指摘できる。

## 註

- 1) 玉城町1995『玉城町史』上巻
- 2) 川崎志乃2001「古墳時代前期の雲出島貢遺跡」『嶋抜 III』 三重県埋蔵文化財センター
- 3) 石井智大2012「弥生時代終末期遺跡群の実態に関する試論」『研究紀要』第21号 三重県埋蔵文化財センター
- 4) 1)と同じ
- 5) 岡田莊司1993「中世の大中臣祭主家」『大中臣祭主藤波家の歴史』藤波家文書研究会
- 6) 伊藤裕作編1996「岩出地区内遺跡群発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター
- 7) 1)と同じ



第8図 小社遺跡とその周辺の発掘調査状況

写真図版 1 (遺構)



調査区南側Pit群（南西から）



S H 2・3（北東から）



S D 4（北東から）



S H 8（北東から）

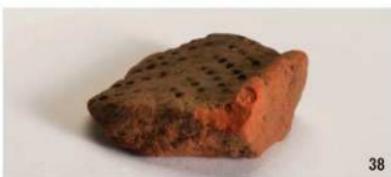


S H 10（南西から）

写真図版2（遺物①）



写真図版3（遺物②）



写真図版 4 (遺物③)



写真図版5（遺物④）



## 報告書抄録

ふりがな	おごぞいせき（だいせき）はつくつちょうさほうこく							
書名	小社遺跡（第3次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	403							
編著者名	樋口太地							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2022(令和4)年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おごぞいせき 小社遺跡	おごぞいせき たまき きらきら 度会郡玉城町 おごぞいせき ね 小社曾根	461	272	34度 17分 78秒	136度 64分 95秒	20191207 ～ 20200224	268m <sup>2</sup>	高度水利機能 確保基盤整備 事業 宮川左 岸地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おごぞいせき 小社遺跡	集落	弥生～中世	堅穴建物、溝、 土穴、ピット	弥生土器、土師器、 須恵器、陶器				
要約	計谷川左岸の中位段丘上に立地する小社遺跡において、工事立会調査を実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての堅穴建物、平安時代後期から鎌倉時代の溝、ピット等が確認された。							

三重県埋蔵文化財調査報告 403

### 小社遺跡（第3次）発掘調査報告 ～度会郡玉城町～

2022（令和4）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 共立印刷株式会社





